

インプラント治療に関わるすべての歯科技工士に推薦する1冊

『チェアサイドと連携したインプラント技工の実践』を読んで

山手デンタルアート（横浜市中区）

遊亀裕一 Hirokazu Yuhki

読者の皆さんへお薦めしたい本がある。それは、杉山雅和氏が本誌にて「インプラント治療を成功に導くために歯科技工士が果たす役割」と題し、2020年3月号より16回にわたり執筆した連載を集約した書籍『チェアサイドと連携したインプラント技工の実践』である。本書では、インプラント治療において歯科技工士も歯科医師や歯科衛生士と共にチーム医療の一翼を担い、診査・診断から術後のメンテナンスまで携わることの重要性を一貫して述べている。それが著者のハイレベルなインプラント技工につながっていることから、読者の皆さんの臨床にも必ず役立つと確信している。

インプラント治療は、固定性補綴の実現により高いレベルの審美的・機能的回復が可能であり、残存歯に対する過重負担の軽減などを含め侵襲を少なくすることができる。そのため、多くの歯科医師に欠損修復の有力な治療法として選択されている。しかし、中には治療の失敗や期待外れな予後、さらには訴訟などの医療トラブルも少なからずあり、それらがメディアで報じられることもある。

インプラント治療においてはいくつかのリスクファクターがある。歯周病原菌はインプラント周囲炎の原因菌であり、天然歯の喪失を生じうる歯周病は局所的リスクファクターである。その他にも、咬合要因、骨質、骨量、粘膜の可動性など患者の局所状態は様々である。加えて、全身状態や口腔衛生管理状態などによっても治療結果は左右される。そのため、現代のインプラント治療は綿密な治療計画の立案が重要視されている。そのような中、歯科技工士がデンタルチームの一員と

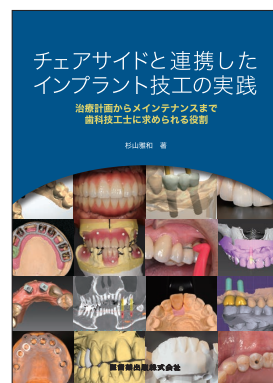
して、インプラント治療の診査・診断から携わり、治療計画へも参加したうえで、技工作業を行う必要性が本書の全体像から理解できる。

* * *

Chapter 1（Knowledge & Communication）では、治療の初期段階から歯科医師や歯科衛生士と共通認識を持ち携わることの重要性を述べている。診断用ワックスアップ一つにしても、歯科技工士が診査・診断から関わり、多くの患者情報とチェアサイドとの共通認識が必要と強調している。アナログ印象から得られた作業用模型や、デジタル印象から得られる限られた情報だけで、歯科医師が望む正確な診断用ワックスアップを製作するのは難しいことがわかる。それは、埋入手術に用いるサージカルガイドの設計・製作や、最終上部構造の製作を視野に入れたプロビジョナルレストレーションにおいても同じことが言える。

Chapter 2（Design & Technique）では様々な臨床例が提示されているが、すべてのケースにおいて、歯科医師が望む治療ゴールを著者が理解・把握したうえで技工作業を行っているのがわかる。その治療ゴールは、歯科技工士である著者からの提案も加味されて設定されているのが素晴らしい。それは診査・診断から携わるうえで必要な、歯科医師と対等に対話できるチェアサイドの知識を著者が持っているからこそ実現できるのだろう。

特にアナログとデジタルの使い分けは見事で、それぞれの長所を見極めたうえでチェアサイドとのコミュニケーションを取り、それを反映させた技工工程を組み立てている。今後インプラント技工もさらにデジタル化が進み、



杉山雅和 著

定価：9,900 円

（本体 9,000 円＋税 10%）

A4 判カラー／176 頁

医歯薬出版株式会社 刊

術式やマテリアルも変わることが予想される。しかし、インプラント治療における歯科技工の目標は変わらない。その普遍性が本書から学べるのは嬉しい。

* * *

著者の杉山氏とは横浜の古い歯科技工士仲間である。また、発足当初から共に学ぶスタディグループ「Wクリック」は、来年30周年を迎えるため長いお付き合いとなっている。今まで多くのことを著者のプレゼンテーションや執筆物から学んだが、一貫して歯科技工士として優れている点があると感じている。それは、今回の著書も同様だが、著者が関わった技工作業の成果を各工程で注視し、そこから評価・検証する姿勢を常に堅持して、あわせて独善に陥らない自分に対する厳しさを持っている点だ。本書ではその土台の上に余す所なく著者のインプラント技工に対する知識が展開されている。著者の努力を過去から知る者として、本書が発刊されるまでに至った杉山氏の努力に感謝と敬意を表したい。

インプラント技工のさらなる高みを目指す歯科技工士にとって宝物になる名著であるのは間違いない。この珠玉と言える本書をお手元に置かれることをお薦めする。